

い ガレキを活かす

「森の防波堤」が命を守る

「植樹による復興・防災の緊急提言」



危機を転じて、木を植えよう！



宮脇昭

目からうろこである。東日本大震災で、瓦礫処理をめぐって、その受け入れを拒む自治体が相次ぎ、暗澹たる思いにかられているときに、本書を読んだ。

著者の宮脇さんは提唱する。膨大な瓦礫を活用して、被災した東北地方の海岸に三〇〇キロの「森の防波堤」を造ろうというのである。

植物生態学者である宮脇さんは、国内外で一七〇〇カ所以上で植樹指導し、四〇〇〇万本の木を植えた。かつては豊かな森に覆われていたが、伐採や戦乱で表土が流され花崗岩が露出して裸山と化した万里の長城の緑を再生する日中共働のプロジェクト（累計植樹本数二〇〇万本）に取り

組んだ人である。

森はいのちを育む基盤であり、文化の母胎であると宮脇さんは言う。その土地本来の潜在自然植生にもとづく広葉樹林の本物の森は、松林などの人工的な森と違って災害に強い。鎮守の森を大切に守ってきた日本人の知恵が今こそ発揮されなければならないと言ふ。

うず高く積まれた瓦礫の山が、鎮魂の丘としてよみがえり、三〇〇キロのいのちの森が築かれる。危機はチャンスなのである。日本再生のシンボルとして、これほどふさわしいものはないのではないか。

花園彰●真宗大谷派圓照寺

私が提言している「いのちを守る森の防波堤構想」は、関東から東北に至る太平洋沿岸の被災跡地にこの本物の森による緑の防波堤を築くことであり、堤づくりに必要な大量の土の調達とがれき処理の二つの問題を同時に解決できる。

今回の提言は、がれきを廃棄物として処理するのではなく、津波対策と環境保全策に有効活用しようというもので、がれき処分の費用を極力減らす経済的効果も得られる。

震災復興における『いのちを守る森の防波堤』の優れた点

被災現場の廃材を有効利用することにより、運搬などの無駄なコストを省ける(経済性)。燃やさないので、環境面にも良い。

その土地本来の色々な種類の常緑広葉樹(潜在自然植生)による森
(高木・亜高木・低木・草本植物による多層群落の森)
高木: タブノキ、スタジイ、アラカシ、ヤマザクラ etc
亜高木: ヤブツバキ、モチノキ、ユズリハ、シロタモ etc
低木: ヒサカキ、ヤツデ、シャリンバイ、トベラ etc

〈森の防波堤イメージ〉



40~50m

通常時は防風林や防砂林として機能し、地域の憩いの場として活用できる。気候の緩和、地球温暖化にも貢献。



ガレキと土壌の間に空気層が生まれ、より根が地中に入り、根がガレキを抱くことにより、木々がより安定する。有機性廃棄物は、年月をかけて土にかえる。